

連載

新屋のアスリートたち

(13)

高校・大学ともにラグビー全国制覇した 高橋 陽之助

華麗なステップで敵の防御を掻い潜って快走し、西宮球技場や秩父宮ラグビー場を沸かせた新屋のラグーマンがいたことを皆様はご存知でしたか？

高橋陽之助は、昭和11年7月27日、南新町で高九酒造（寶生）を営む高橋九郎左衛門・ヨシ夫妻の三男として誕生。8人兄妹の3番目だった。

日新小時代は車や飛行機のテストドライバーを夢見る少年で、人前に出たり、話をするのが大の苦手な生徒であつた。



日新小の頃

5・6年生の頃、校長先生に言われて出場した県内小学校陸上競技会の走り幅跳びで2位となり、全校朝礼で発表された。スポーツへの目覚めだったが、ラグビーという競技は中学を卒業するまで知らなかった。昭和24年、日新中入学と同時に町内の藤澤浩先輩に誘われ、バスケット部に入部。放課後の練習、練習後のコート整備、早朝練習等々、藤澤先輩の公私に亘つての指導は、高橋にとって「スポーツへの取組の原点」になっていった。

長兄・淳市の同級生に石和田任乙と佐忠先生がいた。予てから高橋の

俊足に注目していた石和田が「高九の足の速い『陽ちゃん』何とかならねが」と佐忠に進言。この一言で、秋田工高を受験することになった。

入学後初めてラグビー部の練習試合を見学したが、調子に乗り過ぎて合を見学したが、鎖骨を折り、波乱の第一歩を踏み出すことになった。

家族には危険な運動は止めるように言われたが、自分の意志で継続し、夏合宿前の7月から復帰した。

昭和29年、高校2年になりレギュラーとして札幌国体に出場。決勝で天王寺高を13対0で破り優勝。札幌在住の先輩から大歓迎を受けた。

ところが第34回全国高等学校ラグビー大会決勝では慶応高に5対6で敗れてしまった。



秋工時代

このため3年生の夏合宿は地獄のような練習となったが、前年の悔しさが原動力になり、仲間と一緒に乗り切り、思い出深い合宿になった。第35回全国高校ラグビー大会は決勝で保善高を14対0で破り、初戦から全て完封勝利という偉業で全国制覇を遂げた。

高橋は秋工時代の自分を振り返って「（名選手を輩出している）『新

屋衆のくせに大したことねえな』と言われないように頑張った。身体が大きくない分、相手より一歩でも先に早く動く動作が必要だと考えた末に『のぼこやま』の遊山場で大小の松の木を敵に見立て、左右にスピードをつけて走り抜ける練習を何度も何度も繰り返した。通学は自転車です。3年間『雨にも風にも負けず』秋工（自宅を往復。これが体幹を鍛えてくれた）と言う。



同期の森・元首相と

さて、優勝したその夕方、高桑部長や佐藤忠男監督に呼ばれ、早稲田大学のラグビー部セレクトシオンに参加するよう指示され参加した。一緒に受けた仲間の中に、後に総理大臣になった森喜朗もいた。

めでたく早大ラグビー部の一員となり、3年生でレギュラーポジションをCTBを獲得。秋工時代と同じ背番号13を背負った。

昭和33年、早大ラグビー部は大学日本一になり、関東Aブロックでは立教、青学、法政、中央、慶応、明治を連破して全勝優勝。関西遠征試合でも同志社、関学に連勝。全国大学優勝チームが招待される朝日招待ラグビーでも全九州に20対11で勝利。負け知らずのシーズンを経験した。

早大卒業後は、トヨタ自工からの誘いもあったが、日野自動車に説得されて仕事とラグビーを両立させ、

全日本7人制ラグビー大会の第3回と第5回大会で八幡製鉄を破り、2度の優勝を遂げた。

忘れてならないのは、高橋の次男の陽介のことである。花園に出場可能な高校への進学を希望し、父親の母校の秋工へ進んだ。寒さと秋田弁に悩まされながらの努力が実を結び、3年生の第64回全国大会で16年ぶり14回目の優勝を遂げたのであつた。

父子2代に亘つての全国制覇。しかも藤沢市の家族から遠く離れた地で果たした栄冠に、高橋家では宿願達成に涙したのであろう。

高橋のラグビーに対する情熱は高校・大学・息子と続いたトリプル全国優勝でも衰えることはなかった。



少年たちに模範を

指導者としても「ラグビーという素晴らしいスポーツとフェアプレイの精神を子どもたちに教えたい」と考え、昭和45年、発起人として「藤沢市ジュニアラグビースクール」を立ち上げ、同58（平成12年）は3代目校長も務めた。

また、平成17（25年）は東京の「新屋郷土会」7代目会長も務めた。ラグビー一筋70年で培ったフェアプレイ



近影

精神と、郷土愛にも燃える堂々たる紳士になっていた。（のぼこやま）